

談話におけるうなずきの形態と機能

石田舞子

(信州大学人文学部 4 年日本語教育学専攻)

キーワード：うなずき あいづち 談話 非言語行動 心的操作標識

1. はじめに

現在、談話研究がさかんになされているが、課題は数限りなく存在する。その中でも、いまだ本格的な研究の数が少ないのが、談話と非言語行動の関連性を扱ったものである。さまざまな研究者が非言語行動の分析の重要性を述べていながらも、非言語行動の範囲が広すぎることや、言語資料での記述の仕方が確立していないことなどを理由に言及を避けている。

すべての非言語行動を扱うことは不可能であるので、本論では、あいづちとも関連が深いと考えられるうなずきに焦点をあて、記述と分析を試みる。

2. 先行研究

2. 1 先行研究について

日常会話の内容を省みると、うなずきは「ウン」「アー」「ハー」などの、いわゆるあいづちと共起することが多い。また、あいづちとほとんど同じ意味を持っていると解釈される場合もある。したがって、うなずきを取りあげる時、あいづちと関連づけて考察をすすめてみたい。まずあいづちについて、その後非言語行動についての先行研究をまとめたい。

2. 2 あいづちに関する研究

あいづち研究の代表として、水谷（1984）を取りあげる。

水谷（1984）は「あいづちの話しことばにおける重要性とその外国人に対する教育」を論じている。基本的に、話とは「話し手と聞き手の二者の間で交わされるもの」としている。2人で話をしているときのあいづちは、それぞれの文を完結させてからやりとりする受け答えとは異なり、文の途中でも入れることができるという。あいづちについて「実際には話し手の言い終りに重なっていることが多い」とも述べている。

つまり、相手の話を聞き終り、間があいたのを確認してからあいづちを打つのではないということである。このことは、うなずきについてもあてはまるといえよう。

テレビやラジオの番組を資料とした具体的な分析を水谷は行っている。そして、「あいづちのような間投詞的用法では音調による違いが大きい」ということ、「あいづちに使われることばには個人差がある」ということなどを述べている。

また、あいづちの使用回数と時間及び音節数との関係をデータとしており、その比較をし「あいづちは時間的な単位で打つのではなく、音節数の単位つまり意味のまとまりで打っている」という結論をだしている。

発話の間や一定のテンポであいづちが打たれるわけではないことを考えると、意味のまとまりにより打たれるということに説得力を感じる。そして、このことはまた、うなずきにも共通するのではないだろうか。

2. 3 非言語行動と談話に関する研究

次に、談話と非言語行動を関連させた研究の代表として杉戸(1989)を取りあげる。杉戸(1989)は、非言語行動のうち、あいづちという聞き手の行動を対象として分析を行っている。まず、発話を「実質的な発話」と「あいづち的な発話」とに分けている。それぞれどのような定義をされているか以下に引用する。

「あいづち的な発話」—ハー、アー、ウン、ソーデスカ、ソーデスネーなどの応答詞を中心にした発話。先行する発話をそのままくりかえすオーム返しや単純な聞返し。エーッ、マァー、ホーなどの感動詞だけの発話。笑い声。つまり、実質的な内容を表現する言語形式(上の、たんなるくりかえし以外の名詞、動詞など)を含まず、また、判断、要求、質問など、聞き手に積極的な働きかけもしないような発話。

「実質的な発話」—上のあいづち的な発話以外の種類の発話。なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含んで、判断、説明、質問、回答など、事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話。

杉戸は、「身ぶりのうなずき」がこのどちらと共起しているのか、それとも無言でなされるのかという3種にわけ、談話の参加者それぞれについて数を調べている。「身ぶりのうなずき」とは、「ほとんどの場合が、頭部(首より上、ないし上体)が前後に傾き1回ないし数回往復する動き」のことである。発話の種類との共起の仕方によりうなずきを分けているが、このうち「あいづち的な発話」と共起するものと、無言でなされるものを合わせて「あいづち的な身ぶり」としている。

杉戸の提唱する方法にはいくつか問題点がある。それは、うなずきの分析の仕方というより、発話の定義に関することである。

まず、一発話の数え方に疑問がある。杉戸は発話をポーズで区切って数えている。たしかに、ポーズで区切られた部分を発話だと定義すれば、単位の認定はしやすくなる。しかし、「…ダヨネ ソレデ…」という発話を「ネ」と「ソ」の間にポーズがあれば二つ、そうでなければ一つ、とポーズのみを基準に分けることには説得力がやや弱い。また、うなずきは発話のポーズの周辺のみには現れるものではないので、もっと小さな単位で見ることでもある。

もう一つの疑問は、発話の分類の仕方である。杉戸は繰り返しの発話はいづちとしているが、例えば、自分が発話している途中で相手にことばを先取りされた場合、単に繰り返したのではなく、本来自分が述べるはずだったことを相手のことばを借りて発話したものとも考えることもできる。これを単なる繰り返しやオーム返しと一緒にしていづち的発話を分類してもいいのであろうか。

このように、発話の認定の仕方そのものと、実質的発話・いづち的発話の分類の仕方に疑問が残っている。

もう一点気になることがある。これは杉戸の目的と私の目的が異なるためであるが、杉戸はうなずきを発話との共起の仕方であけており、うなずきの深さや回数は問題にしていなかった。本論では、うなずきの形態そのものによる違いがないか知るために、深さや回数も考慮してうなずきの分類をしたい。

3. 研究の目的

「1.はじめに」で述べたように、本論ではうなずきに焦点をあて、観察と分析を試みる。うなずきといっても浅いものもあれば深いものもあり、また、単独で現れるものの他、連続するものもある。まず、うなずきの形態を観察整理し、また、どのような言語表現と共起するか、個人によって、また談話の種類によって差があるのか、という点について明らかにしたい。

4. 言語資料について

分析に用いた言語資料は、2000年10月・11月に沖研究室が行った東京談話調査の一部を文字化したものである。談話はデジタルビデオカメラ2台とデジタルテープレコーダー1台を用いて収録された。論者も、同調査に参加している。

文字化の方法はいろいろあるが、非言語行動が談話の中のどの位置で発生したのかを見やすくするためと、音調との関係を見るために、沖(2001)の文字化方法に倣い、楽譜方式を用いる。基本的には沖(2001)のとおりだが、必要により記号を省いたり、

または新たに付け加えた。

調査はいくつかのゲームを被調査者にやってもらおうという形で行われた。このうち、今回資料とする談話は、参加者が新聞の人生案内を読み、その悩みに対するアドバイスを、相手と意見を交わしながら練り上げるという内容である。

参加者は被調査者AとB、そして調査者Cの三人である。Aは東京都区内出身の20歳の女性、Bも同じく東京都区内出身の20歳の女性、Cは長野県出身の45歳の女性である。AとBは同じ大学の学生で、以前から友人関係にある。A・Bともに、Cとは調査日に初めて会った。言い換えると、AとBは同輩かつ〈親〉の関係、CとA・Bは〈目上・目下かつ疎〉の関係にあるといえる。

資料として、AとB、AとC、BとCという三つの組み合わせによる談話を各11分から15分程度文字化した。(それぞれ言語資料1、2、3とする。)

5. 言語資料の観察と分析

5.1 観察と分析の方法

ここでは、言語資料を用い、観察と分析を行った結果を述べる。具体的には、計量的観察と出現位置による観察を試みた。それぞれについての結果と考察を以下に述べる。

本論におけるうなずきとは、ある位置からあごを下方にひき、また元の位置にもどす往復運動のことをいう。

分析にあたっては、深さと回数を基準にし、うなずきを5種類に分ける。まず、浅い単独のうなずきを「n1」、普通の深さの単独のうなずきを「N1」、浅い連続したうなずきを「n2」、普通の連続したうなずきを「N2」、浅いものと普通のものが混ざった連続のうなずきを「Nn」とする。

うなずきの観察には、東京談話調査の様子を録画したビデオテープを用いた。中には判断に迷うものもあり、恣意的になった部分もある。しかし、1人の人間が全体を通して見たということで、今回の言語資料における判断の基準はほぼ一定であると考えてよいだろう。

5.2 計量的観察と分析

計量的観察として、言語資料1～3の会話参加者それぞれのうなずきの数を調べた。その結果を以下に表で示す。なお、参考として一分ごとのうなずきの平均を記しておく。

言語資料1 (AとBの対話/約11分)

	n 1	n 2	N 1	N 2	N n	計
A	4 6	2 9	3 3	4	1 0	1 2 2
B	9	2	0	0	1	1 2

Aの1分間のうなずきの回数(平均) 11.1回/分

Bの1分間のうなずきの回数(平均) 1.1回/分

言語資料2 (AとCの対話/約11分15秒)

	n 1	n 2	N 1	N 2	N n	計
A	3 9	3 7	1 1	1 2	2 7	1 2 6
C	4 1	6	3 0	1	2	8 0

Aの1分間のうなずきの回数(平均) 11.2回/分

Cの1分間のうなずきの回数(平均) 7.1回/分

言語資料3 (BとCの対話/約15分30秒)

	n 1	n 2	N 1	N 2	N n	計
B	2 2	1 9	9	0	8	5 8
C	4 3	7	2 3	2	5	8 0

Bの1分間のうなずきの回数(平均) 3.7回/分

Cの1分間のうなずきの回数(平均) 5.2回/分

すべての会話参加者に共通しているのは、使用回数の最も多いうなずきの形態はn 1であるということである。2位までを見ても、n 1—N 1もしくはn 1—n 2の2種類しかない。Cに関して言うと、言語資料2、3のどちらにおいても順位はまったく同じである。

このことからわかるのは、次の2点である。

- (1) 個人によりうなずきの回数は大きく異なるが、一人一人の中では、多く用いるうなずきの形態はだいたい決まっている。また、よく用いられるうなずきは、全員共通で、浅い一回のうなずきである。
- (2) うなずきの総計に対する、n 2 + N 2 + N n、つまり連続するうなずきの割合が、A・B同士の談話、つまり〈同輩・親〉の談話より、Cとの談話、つまり〈目上・疎〉の談話の方が、1.5倍～1.9倍に増えており、逆に〈n 1 + N 1〉、つまり単独のうなずきの割合が0.6倍～0.7倍と

減っている。ただし、これは今回の分析資料から言えることであって、大多数の人にも当てはまる法則であるかどうかは、今後の研究を待たねばならない。

5. 3 出現位置による観察と分析

出現位置の観察では、うなずきがどのようなことばと共に現われるのか、またそのことばの音調はどうなっているのか、各言語資料の参加者のうなずき5種について調べた。そのうち、参加者ごとに、数の多いうなずき（上位2つ）について代表的なものを表にして以下に示す。

「**´**」は、音調の上がり目、「**`**」は音調の下がり目を表わす。

言語資料1

A (n1)

共起することばと音調	出現回数	共起することばと音調	出現回数	共起することばと音調	出現回数
「 ン´ —	8	「 ネ´ —	2	「 ウ´ ン	2
「 ン—	4	「 ネ—	1	「 ウン	1
「 サ´ —	2	「 ネ	2	ウ´ ン	1
「 サー	1	自分の発話の間	4	相手の発話の間	1
サ´ —	1	自分の発話と相手の発話の間	1		

A (N1)

「 ン´ —	6	「 サ´ —	4	「 ウ´ ン	6
「 ン—	3	「 サー	2	「 ネ—	4

B (n1)

「 ン´ —	3	「 ウン	1
「 ン—	4	その他	1

B (n2)

「 ウ´ ン	1
相手の発話と自分の発	1

話の間	
-----	--

言語資料2

A (n1)

「ハ'イ	2	(ケレ)'ド 「モー	4	「ネ'ー	1
「ハイ	1	(ケレ)「ド' モ	1	「ネ	1
「ハー'イ	3	自分の発話 の間	4	'ネ	1
~「ツテ'ー	1	相手の発話 の間	5		
~ツテ	1	相手の発話 と自分の発 話の間	2		
~シ「テ'ー	1				

A (n2)

「ハ'イ	1	「ン'ー	1	「ウ'ン	2
「ハー'イ	3	「ンー	1	「ハ'ー	1
自分の発話 の間	4	相手の発話 の間	10		
自分の発話 と相手の発 話の間	2	相手の発話 と自分の発 話の間	1		

C (n1)

「エ'ー	11	「ン'ー	1	「ネ'ー	2
「エー	6	「ンー'ー	1	「ネー	1
「アー	1	「ハ'ー	1	「ネ	2
「ア	1	相手の発話 の間	8		

C (N1)

「ネ'ー	5	「エ'ー	6	「ウ'ン	4
「ネー'ー	1	「エー	1	「ンー	1

「ネー	1	「ハ'イ	1	「ハー	1
「ネ	1	「ハイ	1	「ソー'	2
自分の発話 の間	1	相手の発話 の間	1		

言語資料3

B (n1)

「ハ'イ	10	「ネ	1
「ンー	2	～ノ「デ'ー	1

B (n2)

「ン'ー	2	「ハ'イ	2	相手の発話 と自分の発 話の間	1
「ンー	1	「ハー'イ	1		
「ン	1	相手の発話 の間	2		

C (n1)

「エ'ー	3	「ア'ー	1	「ン'ー	3
「エー	2	「アー	1	「ハ'イ	2
「ネ	1	自分の発話 の間	4	相手の発話 の間	10
自分の発話 と相手の発 話の間	1				

C (n2)

「ネ'ー	2	「エ'ー	2	「ウー'ン	1
「ネ	2	「ン'ー	2		
自分の発話 の間	1	相手の発話 の間	1		

上記の表に挙げた以外にも、ことばは違うが、音調は「「x' x」「x x」というパターンが多かった。

このようにして、うなずきが共起する発話と音調の関係を観察し気づいたのは、参加者全員、音調の上がり目直後にうなずきが現れる場合が多いということである。このことから、音調の上がり目が何か契機になってうなずいているのではないか、ということが考えられる。しかし、それはあくまで可能性である。普通、会話の際には音調だけを聞いているのではなく、相手の発話内容を特に意識している。よって、発話の内容がどのようなものであるかということも観察したうえで考察を深めなければならないであろう。

5. 4 うなずきの機能についての考察

うなずきを、誰の発話と共起するかという点で分類すると、大きく三つに分けられる。

- ①話し手として自分が発話中（またはそのポーズ）におこなううなずき
- ②聞き手として、相手が発話中（またはそのポーズ）に、あいづちと共に使用するうなずき
- ③聞き手として、相手が発話中（またはそのポーズ）に、無言でおこなううなずき

①のうち、「～（デス）ネー」「～（デ）サー」などと共起するものは、自分の発話内容を強調していると解釈できる。また、一定のテンポで連続して現れるものについては、強調の他、話のリズムをとっているとも考えられる。

②はあいづち同様、「話を聞いている」「理解している」という信号だと考えられる。

③は無言ではあるが、やはり同じで、聞いている・理解しているという信号だと解釈できる。この他、相手の発話内容への賛同を表すこともある。また、質問に対して使われる場合は、肯定の答えとして機能する。

上にあげたのはすべて、聞き手に何か働きかけている場合だが、うなずきは聞き手に向けたものだけなのだろうか。会話中、話し手が無意識にうなずくことがしばしばあることを考えると、聞き手へ及ぼす効果は必ずしも意図されていないともいえる。無意識に近い状態でのうなずきは、むしろ自分自身に向けられたものではないだろうか。

自分向けに働く表現については、定延・田窪（1995）が感動詞を「心的操作標識」と呼び、「ええと」と「あの（一）」を具体例として考察を行っている。「心的操作標識」とは、話し手が心的操作（情報データの入出力や登録、検索、計算、編集など）をモニターするものだという。

うなずきの機能が「ええと」や「あの（一）」の機能とすべて重なるわけではないが、感動詞と同様に「モノや事態、節関係を指示する機能をもたず、反射的に、無自

覚に用いられがち」であることから、やはり「話し手の心的操作をそれだけ純粹に反映」していると考えられる。

ところで、定延・田窪（1995）は、話し手についてのみ述べていたが、聞き手は心的操作を行っていないのであろうか。話し手と聞き手は固定したものではなく、入れ替わるものであることを考えると、聞き手はただ話し手の言うことを聞いているだけでなく、話し手の発話内容を理解するため、また、いつ自分が話し手になってもいいように、情報データの処理を常に行っているはずである。とすると、聞き手には聞き手専用の心的操作標識があるのではないだろうか。うなずきはそのひとつではないかと考えられる。

聞き手専用の心的操作標識として、うなずきは言語表現より有効な点がある。それは、相手の発話を遮らないということである。言語表現の場合、心内をモニターすると、結果的に自分の発した音声相手の発話を遮ってしまう。しかし、うなずきは無音で行うことができるので、相手を邪魔することなくモニターすることができる。よって、黙って聞いている必要がある場合などに、有効な心的操作標識として使うことができるのではないだろうか。

以上のように考えているが、このことをこれまでの観察・分析だけから証明するのは難しいので、今後の課題としておきたい。

6. 今後の課題

談話と非言語行動の関連性を明らかにするための第一歩のつもりで本論を書き上げた。今後の研究のためにも、現時点での課題をまとめておきたい。

一つ目の課題は、資料をより厳密にすることである。音調にしろ、うなずきにしろ、筆者の目と耳を頼りに観察したものである。特に、うなずきの深さについては先に述べたように、恣意的になった場合もあることは否定できない。観察者によって揺れが生じる方法は客観性が低いと言わざるを得ない。今後は、誰が観察しても同じ結果になるような方法を考え、資料作成をしていかなければならないであろう。

二つ目は、他の非言語行動の記述の仕方である。あらゆる非言語行動を記述しようとするれば、資料が煩雑になるとはいえ、うなずきだけを見てはわからないこともある。

今回は他の非言語行動は取りあげなかったが、視線の動きや、うなずきに似た頭部の揺れなど、首から上の部分についてだけでも同時に観察したら何か新しい発見があるのではないだろうか。そのような観察をするためにも、適切な記述方法が求められる。

三つめは、個人差を考慮することである。うなずきだけでも、個人差が大きいことがわかった。とすると、他の非言語行動も個人差がかなり出るものと考えられる。

東京談話調査では同年代の友人である被調査者2人と、その2人より目上にあたり、かつほぼ初対面である調査者、計3人の行動しか観察できなかった。より広く見るためには、各年代から何人か被調査者を集め、その人間関係や男女差も考慮したうえで、組み合わせをいくつか作らなければならない。それだけの資料を作るのは困難であるが、できるだけ資料は多く作るべきだと感じた。

そして、最も重要な課題は、資料の多い少ないに関わらず、丹念に観察をすることである。私もできる範囲で努力はしたが、それが十分だったとは思えない。見落としもあるだろう。そのようなことを避けるためにも、観察と分析には時間をたっぷりとり、資料全体を眺めたり、または一部分をじっくり見たり、さまざまな角度からの観察が重要である。

7. おわりに

以上、うなずきの形態を整理し、どのような言語表現と共起するか、また個人によってうなずきには差があるのか、さらに談話の種類によってうなずきの形態は異なるのかという点について、調査した自然談話資料から分析、考察した。その結果、次のことが分かった。

- (1)うなずきの形態の種類についていえば、浅い一回のうなずき(n1)、浅いうなずきの連続(n2)、深い一回のうなずき(N1)、深いうなずきの連続(N2)、深いうなずきと浅いうなずきの連続(Nn)が、観察できた。
- (2)応答詞や終助詞との共起のほか発話の間(ま)にも、うなずきはみられた。しかし、特定の言語表現と共起することよりも、音調の上がり目直後にうなずきが現れることが多いことに気づいた。
- (3)浅い1回のうなずきが、いずれの話者にも一番多くみられた。
- (4)うなずきには、大きな個人差があった。ただし、特定の個人をとれば、どの談話においてもよく使用するうなずきの形態は決まっていた。
- (5)うなずきの総計に対する、連続するうなずきの割合(n2+N2+Nn)は、<同輩・親>の関係にある談話より<目上・疎>との関係にある談話の方が1.5~1.9倍に増えており、逆に単独のうなずきの割合(n1+N1)は、0.6~0.7倍と減っていた。

これらは、東京都区内出身の20歳の女子学生二人と、長野県出身の45歳の女性の自然談話資料を用いて観察したものである。

今後は、観察者によって測定に揺れが出ないようにすること、視線の動きやうなず

きに似た頭部の揺れなど、首から上の部分についてだけでも観察を詳細にすることが求められる。また、今後は大量の資料から知見を一般化していくことも必要である。いずれにしても、資料を深く観察することが大切になる。

うなずきは無音で行うので、相手の発話を遮らないという特徴を持つ。定延・田窪(1995)は、あいづちを心的操作標識として位置づけているが、うなずきの無音性は、心的操作標識として、言語表現であるあいづちより有効に機能している場合もあると考えている。

【参考文献】

- エンゲル, W・フォン・ラフラー(1981)『ノンバーバル・コミュニケーション<ことばによらない伝達>』大修館書店
- 沖裕子(2000)「談話の最少単位と文字化の方法」『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』信州大学人文学部
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編(1997)『文章・談話のしくみ』おうふう
- 定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(一)」—」『言語研究』第108号、日本言語学会
- ザトラウスキー, ポリー(1991)「会話分析における『単位』について—『話段』の提案」『日本語学』第10巻第10号、明治書院
- (1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- (2000)「共同発話における参加者の立場と言語・非言語行動の関連について」『日本語科学』7号、国書刊行会
- 杉戸清樹(1987)「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相—座談資料の分析』国立国語研究所報告92、三省堂
- (1989)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—談話行動における非言語的表現—」『日本語教育』67号、日本語教育学会
- ナップ, マーク・L(1979)『人間関係における非言語情報伝達』東海大学出版会
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 水谷信子(1984)「日本語教育とはなしことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二巻言語学編』三省堂
- (1993)「『共話』から『対話』へ」『日本語学』第12巻第4号、明治書院
- メイナード, 泉子・K(1993)『会話分析』くろしお出版
- 【付記】 本論文は平成14年1月に信州大学人文学部に提出した卒業論文をもとに、加筆・修正したものである。